日本図の変遷
～赤水から伊能へ～

小野寺淳　平井松午

……2

江戸幕府撰国絵図と日本図

幕府は慶長、正保、元禄、天保と、旧国単位に国絵図の作製を大名(絵図元)に命じた。これを江戸幕府撰国絵図と呼ぶ。国絵図をもとにしたと考えられる各年代の日本総図も残される。

慶長と伝わる国絵図は西国十カ国余り、寛永日本総図は島原・天草一揆前の一六三三（寛永十）年、一揆後の寛永十五年の二種が現存する。正保国絵図は六寸一里（二万一千六百分の一）に縮尺が統一され、小判の中に村名と石までの村高を記し、郡ごとに彩色を変え、郡境は墨線で引き、いろは符号で所領区分を示した。道の両側に対置された黒丸は一里山（塚）を示し、海上は朱線で舟路を引かせた。しかし、正保国絵図は国境や郡境が確定されていなかった地区もあり、寛文期を中心に境界争いが頻発した。

境界争いが決着した段階で、幕府は改めて国絵図作製を命じた。「元禄国絵図」は一六九六（元禄九）年に編纂。その際、複数の大名が分割支配していた陸奥国などは、それぞれが絵図元になり作製した。

国絵図改訂要綱では越前生漉間合（越前和紙）に描き、厚い美濃紙で裏打ち、御領・私領・寺社領の所領区分は無用など、国境付近の所属記載の厳正を求めた。絵図元の大名は幕府御用絵師狩野派に清書させ、同十五年に縮尺は約三十二万四千分の一の元禄日本総図を三分割で仕立てさせた。

献上から約二年後、国境の縁絵図（端絵図、涯絵図ともいう）を作製させ、相互に突き合わせて厳密な国境の確認を行わせた。この点で、元禄国絵図編纂事業は近世国家の確立を示すものといわれる。しかし、元禄日本総図は四国西端が南に下がって描かれたことから、徳川吉宗は一七一七(享保二)年に再製を命じ、建部賢弘が約二十一万六千分の一に仕立てた＝写真。建部は二つの山の位置関係を計測して日本図を仕上げた。

元禄期から約百三十年を経過した天保期になると、村々の石高が変動しており、諸国総国高取調が必要となった。一八三一（天保二）年十二月から郷帳の改訂が指示され、実高の提出が求められた。その後、同六年十二月から諸大名に元禄国絵図を写させ、これを数等分に分割した懸紙に河川流路や増減した村など、変更箇所を図示させた。絵図元から懸紙の修正図が幕府に届けられ、狩野派によって清書された。この段階で、すでに伊能忠敬「大日本沿海輿地全図」が献上されていたので、日本総図の作製は命じられなかった。

（おのでら・あつし＝放送大茨城学習センター所長）

「松浦静山旧蔵日本全図（享保の日本図）」守屋嘉コレクション、広島県立歴史博物館蔵・画像提供　152×336㌢

2022年10月18日東京新聞